「石巻専修大学　研究紀要」第34号　99-108　2023年３月

「キャリア・パスポート」の効果的な活用に関する一考察

横江　信一＊

A Study on Effective Utilization of "Career Passport"

Shinichi YOKOE

*Department of Human Education,Faculty of Human Studies,
Ishinomaki Senshu University, Ishinomaki 986-8580,Japan*

1. はじめに

今日、少子高齢化に伴う生産年齢人口の減少、情報化、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は急速に変化しており、予測が困難な時代となっている。

一方、児童生徒を取り巻く社会的な環境が大きく変化していく学校教育においては、学んだことを人生や社会と関連付けられるような指導や学校段階間の接続を重視した指導が求められてる。

このような背景の中で、文部科学省は2019年3月29日、「『キャリア・パスポート』例示資料等について（事務連絡）」を各都道府県教育委員会へ発出している。名称や目的、内容、指導上の留意と共に様式例も明示している。[1)]この「キャリア・パスポート」は児童生徒が小学校から高等学校までのキャリア教育に関わる活動に関することを記入し、記録として保管するポートフォリオのことで、キャリア教育の充実を図るための教材として注目されている。

これは、学習指導要領総則（2017年３月告示）第１章第４の１の（3）で、「児童が、学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要としつつ各教科等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること。」を受け、小学校学習指導要領第６章特別活動第２〔学級活動〕３内容の取扱い（2）「２の（3）の指導に当たっては、学校、家庭及び地域における学習や生活の見通しを立て、学んだことを振り返りながら、新たな学習や生活への意欲につなげたり、将来の生き方を考えたりする活動を行うこと。その際、児童が活動を記録し蓄積する教材等を活用すること。」からである。[2)]

しかし、文部科学省事務連絡で様式例まで示されることは珍しい。これは、実施準備ができている学校は2019年４月から活用し、全ての学校で2020年４月から実施できるようにすることや、小学校・中学校・高等学校で一斉に実施し、キャリア・パスポートを高等学校まで持ち上がる等、校種間連携、共通実践の必要性からであると考える。

そこで、キャリア教育の課題と必要性をまとめるとともに、小学校・中学校・高等学校へと系統的な取組と円滑な引継ぎにつながる「キャリア・パスポート」の効果的な活用の在り方について検討していく。

2. キャリア教育の意義と役割

2.1　キャリア教育が求められる背景

キャリア教育は、中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」（2011.1.31文部科学省）の中で、「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義している。[3)]

この定義により、キャリア教育は一人一人の社会的・職業的自立に向けた教育であり、「必要な基盤となる能力や態度を育てること」が学校教育において求められているものと捉えられる。

日本における若者の社会的・職業的自立の現状について、厚生労働省の調査によれば、就職後３年以内の離職率は、2015年度の高等学校卒業者で39.3%、大学卒業者で31.8%に上ることが分かり、就職しても３割以上の若者が早期離職しているという現状があるといえる。[4)]

＊石巻専修大学人間学部人間教育学科

表１　キャリア教育の課題

・職場体験活動のみをもってキャリア教育を行ったものとしているのではないか。
・社会への接続を考慮せず、次の学校段階への進学のみを見据えた指導を行っているのではないか。
・将来の夢を描くことばかりに力点が置かれ、「働くこと」の現実や必要な資質・能力の育成につなげていく指導が軽視されていたりするのではないか。

幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について
（中央教育審議会答申 2016 年 12 月 21 日）

さらに、内閣府による初職の離職理由に関する調査で一番多かった項目が「仕事が自分に合わなかったため」(43.4%)、次いで「人間関係がよくなかったため」(23.7%) となっている。[5)]

以上のことを踏まえ、学校教育においては、キャリア教育の理念が浸透してきている一方で、表１のような課題が指摘されている。

キャリア教育は、小学校段階から高等学校段階までの教育活動全体の中で「基礎的・汎用的能力」を育むものであるが、小学校段階においては、特別活動において進路に関する内容が存在しなかったために、体系的に行われていない場合もあり、キャリア教育本来の役割を改めて明確にするためにも、小学校段階から特別活動の中にキャリア教育の視点を入れていくことが重要であると指摘された。

そこで、小学校学習指導要領（2017 年告示）では、学級活動（3）に新しく「一人一人のキャリア形成と自己実現」が加わった。これにより、キャリア教育の視点から小学校・中学校・高等学校のつながりが明確になった。

学習指導要領（2019 年告示）の総則には、児童生徒が「学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要としつつ各教科等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図る」ことが示された。

2.2 「基礎的・汎用的能力」としての４つの能力

キャリア教育は、一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる資質・能力を育てることを目標としている。こうした資質・能力を校種段階に応じた「基礎的・汎用的能力」として、試案段階であるが図１のような以下の４つの能力に整理することができるものと考えた。

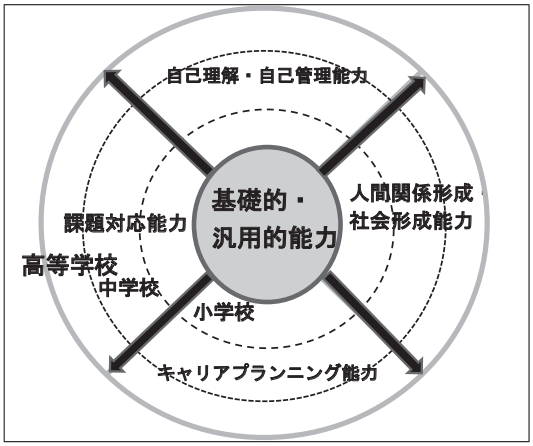


図１　校種に応じた「基礎的・汎用的能力」４つの能力関連図

「基礎的・汎用的能力」の４つの能力が小学校から高等学校までの段階的な育成によって、社会的・職業的自立に向けた基盤が同心円状に広がるものと捉えた。以下、整理されたことをもとに、それぞれの能力についてまとめた内容を順に示すこととする。

①人間関係形成・社会形成能力

社会の中で生活する、あるいは仕事をするとき、他者と協働して取り組むことが必要である。他者と協働する中で、自分の考えが深まったり、自分の知らなかった一面に気づいたりすることができると考えられる。こうした経験を通して、多様な他者を認めつつ、既存の社会に主体的に参画していく態度が培われるであろう。

また、先述の通り、初期の離職理由として二番目に多かったのが人間関係に関わる項目であった。この実態を受け、学校教育の中で他者との関わりを通して学びを深めたり、役割を果たしたりといった経験を蓄積しておくことが、社会に出る準備として大切であると考えられる。

②自己理解・自己管理能力

前向きに考え行動するには、自己に対する理解、特に自分自身のよい点や強み、可能性を含めた肯定的な理解が基盤となる。また、自己の適性や役割を理解することで、将来に対しての見通しをもち、主体的に自らのキャリアを形成していこうと

する姿勢につながると考えられる。しかしながら、自己理解とは肯定的なものだけではない。自分の悪い点や課題について気づくことも大切な自己理解である。そのような場合であっても、他者と対話的に関わりながら、自らの感情を律し、少しでも克服していこうとすることが大切であろう。つまり、自己に対する様々な理解を通して主体的な行動につなげていくことができる能力であると捉えられる。

③課題対応能力

主体的な進路選択に向けて、様々な活動の中で課題の発見・分析や、適切な計画を立ててその課題を処理し、解決する経験を積んでおくことが大切であると考えられる。課題解決に向けては、膨大な情報の中から適切な情報を収集・選択する能力等も必要になる。したがって、学校行事等の準備として行われる調べ学習等の機会を通して、課題解決に向けた学習過程を経験しておくことが大切であるだろう。

④キャリアプランニング能力

社会人・職業人として生活していくために、働くことの意義を理解し、今学んでいる様々な内容と関連付けながら、一人一人が主体的にキャリアを形成していくことが求められる。そのためには、学校教育における様々な活動やそこでの経験が将来につながっていることに気づかせるような実践が大切となる。

なお、図1のように、これら4つの能力は、小学校から高等学校までの12年間を通して高めながら相互に関連し合うことによって、基礎的・汎用的能力が大きく育っていく。つまり、図1の基礎的・汎用的能力の円の面積が矢印の方向に広がっていくことになると考えることができる。

3.「キャリア・パスポート」の意義と役割

3.1　ポートフォリオの有用性

児童生徒が自己の生き方や進路を真剣に考えるときに注目されるものが「ポートフォリオ」である。キャリア教育の場面において、学習や活動の内容を記録し振り返ることは、児童生徒にとっても、教師にとっても意義のあることである。そうした活動を促す組織的・体系的な働きかけと、それを支える教材を考えたとき、その時々の活動を記録し、蓄積していく「ポートフォリオ」は、まさに適した教材とみることができる。

表2　「ポートフォリオ」の活用に関する根拠

学校、家庭及び地域における学習や生活の見通しを立て、学んだことを振り返りながら、新たな学習や生活への意欲につなげたり、将来の（在り方）生き方を考えたりする活動を行うこと。その際、（児童）生徒が活動を記録し蓄積する教材等を活用すること。 ※「学習指導要領特別活動第2〔学級活動・ホームルーム活動〕3内容の取扱い」より
子供一人一人が、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返ったりできるようにすることが重要である。そのため、子供たちが自己評価を行うことを、教科等の特質に応じて学習活動の一つとして位置付けることが適当である。例えば、特別活動（学級活動・ホームルーム活動）を中核としつつ、「キャリア・パスポート（仮称）」などを活用して、子供たちが自己評価を行うことを位置付けることなどが考えられる。その際、教員が対話的に関わることで、自己評価に関する学習活動を深めていくことが重要である。 ※中央教育審議会答申（2016年12月21日）
（前略）…既に複数の自治体において、「キャリアノート」や「キャリア教育ノート」などの名称で、児童生徒が様々な学習や課外活動の状況を記録したり、ワークシートとして用いたりするなど、子供自らが履歴を作り上げていく取組が行われており、こうした取組も、「キャリア・パスポート（仮称）」と同様の趣旨の活動と考えることができる。こうした既存の取組の成果を参考としながら…（後略） ※中央教育審議会答申注釈（2016年12月21日）

学習指導要領（2017、2018年告示）や2016年の中央教育審議会答申においても、表2の下線部分のように、「ポートフォリオ」の活用が「キャリア・パスポート」の活用根拠になっている。

3.2　「キャリア・パスポート」の目的と定義

「キャリア・パスポート」は、前述のとおり、文部科学省初等中等教育局児童生徒課から各都道府県教育委員会指導事務主管課や各指定都市教育委員会指導事務主管課等宛てに「『キャリア・パスポート』例示資料等について」の事務連絡が発出され、2020年4月からすべての小・中・高等学校で実施することとなった。[6)]

資料は、学校等における「キャリア・パスポート」作成の負担軽減の一助となるように参考として示され、「『キャリア・パスポート』の様式例と指導上の留意事項」の中で、その目的、定義について表3のように整理されている。

表3 「キャリア・パスポート」の目的と定義

（目的）小学校から高等学校を通じて、児童生徒にとっては、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返ったりして、自己評価を行うとともに、主体的に学びに向かう力を育み、自己実現につなぐもの。
教師にとっては、その記述をもとに対話的にかかわることによって、児童生徒の成長を促し、系統的な指導に資するもの。

（定義）「キャリア・パスポート」とは、児童生徒が、小学校から高等学校までのキャリア教育に関わる諸活動について、特別活動の学級活動及びホームルーム活動を中心として、各教科等と往還し、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり振り返ったりしながら、自身の変容や成長を自己評価できるよう工夫されたポートフォリオのことである。 なお、その記述や自己評価の指導にあたっては、教師が対話的に関わり、児童生徒一人一人の目標修正などの改善を支援し、個性を伸ばす指導へとつなげながら、学校、家庭及び地域における学びを自己のキャリア形成に生かそうとする態度を養うよう努めなければならない。

3.3 「キャリア・パスポート」の管理

小学校から高等学校までの記録が蓄積されることを前提としていることから、各学年での蓄積、A4（両面印刷可）で5枚以内とされている。また、指導上の留意点と「キャリア・パスポート」の管理を表4のとおり示している。

表4 指導上の留意点と「キャリア・パスポート」の管理

①キャリア教育は学校教育活動全体で取り組むことを前提に、「キャリア・パスポート」やその基礎資料となるものの記録や蓄積が、学級活動・ホームルーム活動に偏らないように留意すること
②学級活動・ホームルーム活動で「キャリア・パスポート」を取り扱う場合には、学級活動・ホームルーム活動の目標や内容に即したものとなるようにすること
③「キャリア・パスポート」は、学習活動であることを踏まえ、日常の活動記録やワークシートなどの教材と同様に指導上の配慮を行うこと
④「キャリア・パスポート」を用いて、大人（家族や教師、地域住民等）が対話的に関わること
⑤個人情報を含むことが想定されるため「キャリア・パスポート」の管理は、原則、学校で行うものとすること
⑥学年、校種を越えて引き継ぎ指導に活用すること
⑦学年間の引き継ぎは、原則、教師間で行うこと
⑧校種間の引き継ぎは、原則、児童生徒を通じて行うこと
⑨装丁や表紙等についても、設置者において用意すること。その際には、一定の統一性が保たれるよう工夫すること

4.「キャリア・パスポート」の構想

4.1 「キャリア・パスポート」の内容

「キャリア・パスポート」の内容については、各地域・各学校における実態に応じ、学校間で連携しながら、柔軟な工夫を行うことが期待され、都道府県教育委員会等、各地域、各学校で柔軟にカスタマイズされることを前提に、表5のとおり示されている。

表5 「キャリア・パスポート」の内容

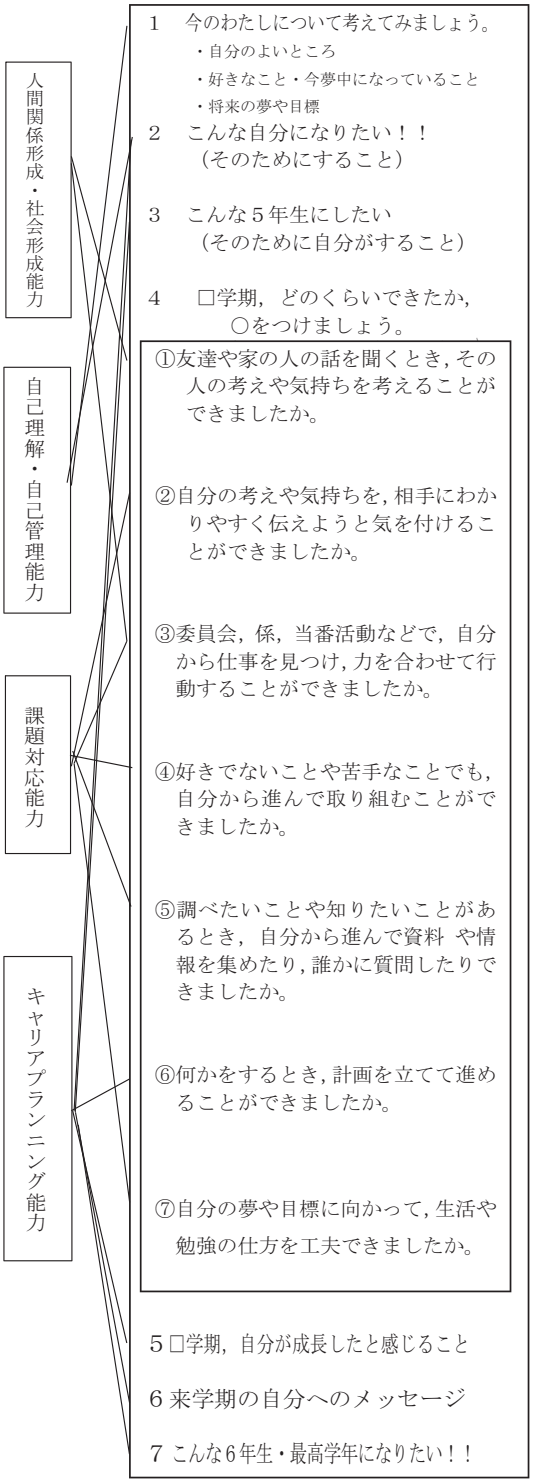
①児童生徒自らが記録し、学期、学年、入学から卒業までの学習を見通し、振り返るとともに、将来への展望を図ることができるものとする
②学校生活全体及び家庭、地域における学びを含む内容とする
③学年、校種を越えて持ち上がることができるものとする
④大人（家族や教師、地域住民等）が対話的に関わることができるものとすること
⑤詳しい説明がなくても児童生徒が記述できるものとすること
⑥学級活動・ホームルーム活動で「キャリア・パスポート」を取り扱う場合にはその内容及び実施時間数にふさわしいものとすること
⑦カスタマイズする際には、保護者や地域などの多様な意見も参考にすること
⑧通常の学級に在籍する発達障害を含む障害のある児童生徒については、児童生徒の障害の状態や特性及び心身の発達の段階等に応じて指導すること。また、障害のある児童生徒の将来の進路については、幅の広い選択の可能性があることから、指導者が障害者雇用を含めた障害のある人の就労について理解するとともに、必要に応じて、労働部局や福祉部局と連携して取り組むこと
⑨特別支援学校においては、個別の教育支援計画や個別の指導計画等により「キャリア・パスポート」の目的に迫ることができると考えられる場合は、児童生徒の障害の状態や特性及び心身の発達の段階等に応じた取組や適切な内容とすること

この「キャリア・パスポート」を効果的に活用した学習活動を展開することによって、児童生徒が自己の変容や成長を実感し、自己肯定感や自己有用感を高めることが期待されている。そして、教師が児童生徒の実態を把握し変容や成長を認めるなど児童生徒の理解を深めることによって、児童生徒を新たな目標へと導き、児童生徒の主体的に学ぶ力の育成やキャリア形成を促すことを目指している。

4.2 基礎的・汎用的能力との関係性

文部科学省の「キャリア・パスポート」例示資料と「基礎的・汎用的能力」としての4つの能力との関係性をまとめてみると表6のようになる。

表６「基礎的・汎用的能力」との関連性[6)]



資料：文部科学省「キャリア・パスポート」（5年生）例示資料より

4.3　基礎的・汎用的能力と関連した培いたい力

秋田県教育委員会で作成した秋田わか杉「キャリアノート」『あきたでドリーム（AKITA de DREAM)』では、県内小・中学校において、児童生徒の発達の段階を踏まえながら系統的・継続的に活用することによって、社会的・職業的自立の基盤となる能力や態度の育成の一助となるノートにしている。

また、高等学校に進学する県内の小・中学生の全員が､小･中学校９年間で蓄積したキャリアノートを高等学校へ持ち上がることによって、小･中･高等学校を貫くキャリア教育を推進している。

作成の方針の一つ目として、県内の各小・中学校でキャリア教育を実践する際に、秋田わか杉「キャリアノート」『あきたでドリーム（AKITA de DREAM)』を核としながら、児童生徒によるまとめや自校の配付物等をはり付けるなどしてポートフォリオを作成することによって、児童生徒自身が小学校から中学校までの９年間を振り返りながら、自己の将来の生き方や就きたい職業を考えることができるようにする。

二つ目として、基礎的・汎用的能力及びふるさと教育のねらいに係る以下の①～⑤の５点を共通項目として、表７の秋田わか杉「キャリアノート」の例のように盛り込みながら、学齢や発達の段階を踏まえた構成となるようにしている。

①周囲と心を通わせる。
②自分を見つめる。
③働くことに触れる。
④自分の夢やライフプランを描く。
⑤ふるさと秋田とのつながりを考える。
（地域、社会、自然、人 等）

以上のことを踏まえ、秋田県大館市の場合､「大館ふるさとキャリア教育」の各校種において、全教育活動をキャリア教育の視点から進めている。例えば、各校の日常の中で行われる振り返り（各教科等の授業やファイルへの活動記録のまとめ等）と、その場面で培われた振り返る力を基盤にしながら「キャリアノート」を書くことが行われている。こうした日々の活動と、ある程度の時間を取ってキャリア・パスポートを書く活動とをキャリア教育の視点から一体的に捉え、いずれも振り返る力を培うことが重要になっている。

表7　秋田わか杉「キャリアノート」の例[7)]
（※下線は「ふるさと教育」との関連）

【5年生の例】
＜小学5年生のわたし①＞
1　みんなのために自分ができること
2　計画を立ててがんばりたいこと
3「なりたい自分」（将来、どんな自分になりたいか。）
4　計画を立ててがんばりたいこと
5　みんなのために自分ができること
6　働くこと（仕事）を私はこう考える
7　地いきのよさについて感じていること（他の人にしょうかいしたいところ）
8　1年間でこうなる宣言 せんげん
9　そのためにどんなことにチャレンジするか。
10　先生から

＜小学5年生のわたし②＞
11　4月に決めた「こうなる！」宣言は、実現できたか。
12　自分のことをふり返ってみる。
(1つに○を付ける。)
(あてはまる、ややあてはまる、あまりあてはまらない、あてはまらない)

①みんなのために自分ができることをやっている
②計画を立てて、がんばりたいことに取り組んでいる
③「なりたい自分」に向かって努力している
④地いきのよさにふれている
⑤「働くこと」の大切さ、意味について考えている
⑥（自分で決めたこと）
⑦（自分で決めたこと）

13　この1年間で見つけた自分のもち味（自分らしさ）
14　この1年間でちょうせんして、学んだこと
15　先生から保護者の方から

資料：秋田県教育委員会秋田わか杉「キャリアノート」より

5.「キャリア・パスポート」の活用

5.1　青森県の活用事例から[8)]

青森県の「キャリア・パスポート」は、「明日へはばたく力（培いたい力）」として4つの基礎的・汎用的能力の他に4つの力を培うための支えとなる「自分自身を大切に思う気持ち」と「ふるさとを誇りに思う気持ち」を設定している。

【小学校】

＜自己を見つめる力＞（自己理解・自己管理能力）

・自分自身を客観的・肯定的に見つめ、自分がしたいこと、できることを理解し、それに向かって自己をコントロールし、主体的に学んだり行動したりする。

＜つながる力＞（人間関係形成・社会形成能力／キャリアプラニング能力）

・自己を見つめる力をもとに、他者、自分を取りまく環境（社会）、将来を見通した生き方（未来）とのかかわり方を考え、積極的につなげていこうとする。

＜動く／生かす力＞課題対応能力

・仕事をする上での課題を発見・分析し、適切な計画を立ててその課題を処理し、解決する。

＜創り出す力＞キャリアプラニング能力

・自分や他者のよさを踏まえ、自らの経験や様々な情報等を総合的に活用し新たな価値を生み出したり、仕組みを創り出したりする。またそれを発信する。

【自分自身を大切に思う気持ち】

誰かの役に立ちたい、誰かに必要とされているといった、他者の存在を前提として自分の存在価値を感じる気持ちであり、社会の一員として自らの果たすべき役割を考えていく上で、基礎となる感覚。

【ふるさとを誇りに思う気持ち】

郷土（青森県、自分の住む地域）のよさを知るとともに、他の地域・異なる文化との違いを知り、ふるさとを誇りに思う気持ち

5.2　「キャリア・パスポート」の活用場面例 9)

①特別活動　　◎ねらい、・主な学習活動

小学校 低～高学年 年度はじめ
「○年生になって」
◎生活や学習上の課題を基に、見通しをもって計画的に実行し、振り返ったことを次に生かすことができる。
・将来の夢や○年生としてなりたい自分、できるようになりたいことを発表し合う。

中学校 3 学年
「18 歳の私へ」
◎将来の夢や目標と結び付けながら、学ぶことの意義を自覚し、見通しをもって努力することができる。
・自分の成長を振り返った上で、将来の自分を想像し、グループで話し合う。
・これから大切にしようと思うことなどを基に、3 年後の自分に手紙を書く。

②その他の教科等

【生活】小学校 2 学年
「学校を案内しよう」
◎自分の役割を自覚し、主体的に取り組むことができる。
・1 年生に学校のことを伝え、進級して上級生になった自覚をもつ。

【道徳】小学校 4 学年
「いつかにじをかける」
◎自分で立てた目標に向かって、粘り強くやり遂げようとする態度を育む。
・マラソン選手について知る。
・夢や目標の実現について話し合う。

【図画工作】小学校 6 学年
「十年後の私」
◎友達の作品のよさを味わうことを通して、自分が思い描く未来の姿を見つめ直すことができる。
・未来のある日の自分の姿を想像して立体で表した作品を作り、鑑賞し合う。

【総合的な学習の時間】中学校 1 学年
「働く人から学ぼう」
◎働くことの大切さを知り、将来について考えることができる。
・身近な人の働く姿を知る。
・地域の職業人の話を聞く。

【英語】中学校 2 学年
「My Dream」
◎将来の夢や目標と結び付けながら、学ぶことや日常生活を送ることの意義を自覚し、見通しをもって努力することができる。
・自分の将来の目標や、その目標に近づくために自分がやるべきことについて考える。

【社会】中学校 3 学年
「労働環境の変化と課題」
◎現代の労働者を取り巻く問題点について理解し、将来の自分の生き方を考えることができる。
・日本の労働環境の変化と雇用形態の特徴を知り、その問題点について考える。

【総合的な探究の時間】高等学校 1 学年
「自己理解を深める」
◎自分の適性を理解し、自分の進路について肯定的に捉えることで、これからの生き方を考える。
・物事を別の視点から見たり他者の視点から見たりしながら自分について考える。

【家庭科】高等学校 1 学年「生活設計」
◎生涯を見通した生活について主体的に考え、ライフスタイルと将来の家庭生活や職業生活について考察し、生活設計を工夫できる。
・一生について生涯発達の視点で捉え、様々な生き方があることを理解する

前述でも触れているが、「特別活動を要としつつ各教科等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること。」と、学習指導要領の総則にあるが、キャリア・パスポートと教育課程との関連が重要であると考える。

5.3 「キャリア・パスポート」活用上の留意点

「キャリア・パスポート」は学習活動であることを踏まえ、日常の活動記録やワークシートなどの教材と同様に指導上の配慮を行うことが必要である。児童生徒個々の状況を踏まえ、本人の意思と

反する記録を強いたり、無理な対話に結び付けたりすることは望ましくない。

空欄や白紙であるページができたとしても、それがそのときの自分自身なので、無理に本人の意思と反する記録を残すことはしないことが望ましい。うまく書けない児童生徒への対応や学級・学年間格差解消等についても、日常の指導と同様である。

特別支援学級に在籍する児童生徒、通級による指導を受ける児童生徒等、特に特別な配慮を要する児童生徒については、個々の障害の状態や特性及び心身の発達の段階等に応じた記録や蓄積となるようにする。なお、「キャリア・パスポート」は自己評価、学習活動であり、そのまま学習評価とすることは適切ではない。

5.4　対話的な関わり方について

「キャリア・パスポート」を用いて、大人（家族や教師、地域住民等）が対話的に関わることが重要である。対話といっても、話すだけとは限らない。例えば、生徒が書いた記録に対して、教師が感想を書き込んだり、赤ペンでアンダーラインを数か所引いたりするだけでもよいのである。「キャリア・パスポート」にコメントを書く際は、児童生徒の自己有用感の醸成や自己変容の自覚に結び付けられるようなことを書くようにする。児童生徒の成長を大人が受け止め、児童生徒が頑張っていけるよう肯定的なコメントが望ましい。思春期には、否定的な記録を残す児童生徒もいる。例えば、進路に関する質問に対して「希望は特になし」と書くことがあるかもしれない。それでも、強制的に書かせたり振り返らせたりせず、じっと寄り添うことが大切である。

「キャリア・パスポート」には、様々な記録が蓄積されるわけであるが、それだけでは単なる記録集である。それを児童生徒のキャリア形成につなげられるかどうかは、教員による意図的な対話、働きかけにもかかっている。

6.　学びをつなぐ振り返りシート

秋田県教育委員会で作成した秋田わか杉「キャリアノート」『あきたでドリーム（AKITA de DREAM）』の振り返りシート「小学６年生のわたし②」を例に検討する。（図２参照）

振り返りシートの内容は、学年末でのキャリア・パスポートに記述する際の基礎資料とすることができる。児童生徒が学んだ内容がキャリア・パスポートに反映されるよう、普段から目標と振り返りの習慣を付ける、そして振り返りを各自で保管・蓄積しておくことが大切であると考える。学校によっては、既に活動の記録を蓄積している例もあるだろう。こうした既存のポートフォリオもキャリア・パスポートの基礎資料とすることができる。しかし、大量のワークシートが入ったポートフォリオから、児童生徒がキャリア・パスポートに残したい内容を選び抜くには時間がかかる。そこで、振り返りシートとして、「目標」「振り返り」そして「自己理解」に関わる内容を集約することで、児童生徒が学びのつながりや自己理解の深まりを実感し、次の取組に向けて学ぶ意欲を向上させていくことにつなげたいと考えた。また、振り返りを行う際の教師との対話的な関わりにより、児童生徒が自己理解をさらに深め、自らの成長を実感するきっかけが生まれることが期待できる。

図２の「自分のことをふり返ってみる」の①～⑤を「基礎的・汎用的能力」と振り返りシートの関係性を分類してみると表８のようになる。

「今までに比べてがんばったこと」や「新たに発見したこと」を記入する欄として、「小学校６年間で見つけた自分のもち味」があり、自分の成長を実感し、肯定的な自己理解を促し、深めることをねらいとしている。もう一つは「現時点での課題」や「今後取り組んでいきたいこと」を「中学校でチャレンジしたいこと」の記載する欄であり、さらに成長していきたい部分や次に向けて取り組んでいきたいことを意思決定することができるものと考える。

7.　おわりに

「キャリア・パスポート」は、子供たちが様々な機会に記入し、積み重ねて、自分の学びや成長につながるようにするものである。記述し積み重ねた「キャリア・パスポート」や、「キャリア・パスポートの基礎資料」をもとに、これまでの自分の学習や生活などを振り返って成長や頑張りに子供

キャリアノート　小学6年生②

小学6年生のわたし②

過去の自分をふり返り、未来の「なりたい自分」につなげよう。

4月に決めた「こうなる！」宣言は、実現できたか。　月　日（　）

自分のことをふり返ってみる。（1つに○を付ける。）

	あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
① みんなのために自分ができることをやっている				
② 計画を立てて、がんばりたいことに取り組んでいる				
③ 「なりたい自分」に向かって努力している				
④ 地いきのよさにふれている				
⑤ 「働くこと」の大切さ、意味について考えている				
⑥（自分で決めたこと）				
⑦（自分で決めたこと）				

小学校6年間で見つけた自分のもち味（自分らしさ）

中学校でチャレンジしたいこと

先生から

保護者の方から

図2　振り返りシート「小学6年生のわたし②」[7)]

たち自身が気付き、生き方についての考えを深めることができるようにしなければならない。そして、なりたい自分やよりよい自分に向かって、希望や目標をもって前向きにがんばることができるようにするものである。

表8　「基礎的・汎用的能力」と振り返りシートの関係性

人間関係形成・社会形成能力	①「みんなのために…」 ④「地いきのよさ…」
自己理解・自己管理能力	②「計画を立てて…」
課題対応能力	⑤「働くこと」…
キャリアプランニング能力	③「なりたい自分」

このように、「キャリア・パスポート」は小学校から中学校、そして高等学校へと12年間を通じて活用され、引き継がれていく。今までも将来のことについて考えることは発達の段階に応じて行われてきたが、校種をつないで引き継がれ、教材として活用されることは少なかったのではないだろうか。この「学びをつなぐもの」として作成された「キャリア・パスポート」を意義あるものにするためには、児童生徒と教師が「キャリア・パスポート」を有益なものとして互いに認識することが必要である。

そのためには、まずは教師が「キャリア・パスポート」の意義についてしっかりと理解し、児童生徒に対して何のために「キャリア・パスポート」を作成するのかについてきちんと理解させることが大切である。さらに、高等学校は小・中学校段階で記録された9年間の蓄積記録を引き継ぐ立場にある。大きな進路選択の分岐点である高等学校においては、そのことを自覚し、「キャリア・パスポート」が更に意義あるものになるよう、学校の教育活動全体を通じた効果的な活用が望まれる。

参考・引用文献

1）文部科学省「キャリア・パスポート」例示資料等について（2019.3.29）

2）文部科学省「小学校学習指導要領（平成29年告示）」（2018.2.28）

3）中央教育審議会「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」p.39（1999.12.16）

4）厚生労働省「学歴就職後3年以内離職率の推移」（2020.3.1）

5）内閣府「特集 就労等に関する若者の意識」https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h30honpen/s0_0.html（2020.3.1）

6）文部科学省　国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター「キャリア教育リーフレットシリーズ

特別編キャリア・パスポートって何だろう？」(2018.5)
7) 秋田県教育委員会「秋田わか杉キャリアノート」より引用
8) 青森県教育委員会「キャリア・パスポート」より引用
9) 栃木県教育委員会「キャリア・パスポート」の導入に向けて～小・中・高の学びをつなぐキャリア教育充実のために～（2020.1）